

呉兢著「東洋の帝王学、貞観政要」徳間書店 1975年12月20日刊を読む

人道は謙を好む

1. 貞観2年、太宗が側近の者に語った。

「『天子になれば、人にへりくだる必要もないし、なにひとつ恐れることはない』と言う者がいるが、わたしは、常に天を恐れ、臣下の批判に耳を傾けながら、つとめて謙虚に振舞ってきた。

昔、聖天子の舜^{しゆん}が禹^うをいましめて、『そなたが自分の能力や功績を鼻にかけず謙虚に振舞うようになれば、そなたと能力や功績を争う者がいなくなる』と語っているし、『易経』にも、『驕慢を憎んで謙虚を好むのが人の道だ』とある。

2. 天子たるもの、謙虚さを忘れて不遜な態度をとれば、かりに正道を踏みはずしたとき、その非を指摘してくれる者など、一人もおるまい。わたしは、一言述べようとするごとに、また、なんぞ行動を起こそうとするたびに、必ず、天の意志にかなっているだろうか、そしてまた臣下の意向に沿っているだろうかと自戒して、慎重を期している。なぜかといえば、天はあのように高くはあるが下々のことによく通じているし、臣下の者はまたたえず君主の一挙一動に注目しているからだ。だからわたしは、つとめて謙虚に振舞いながら、そのうえさらに、わたしの語ること行なうことが、天の意志と人民の意向に合致しているかどうか、反省を怠らないのである」

3. 魏徴が答えた。

「古人も『初めはすべてよかりしものを、なぜに終わりをよくしたまわぬ』と語っています。どうか陛下におかれましても、天を恐れ人民を恐れて常に謙虚に振舞われ、日々、反省を怠りなきようお願いあげます。さすれば、わが国は長く繁栄し、滅亡の悲運に泣くことはありますまい。かの堯舜の世が太平であったのは、常にこのことを心掛けたからに外なりません」

[コメント]

謙虚であることの大切さを唐の時代の基礎をつくった太宗はよく教えてくれる。

- 2010年3月28日 林明夫記 -